指導案

資料名	進　　路	**出　典**	中学校道徳指導細案
主題名	理想の実現	**内容項目**	１－（４）
日　時	平成１６年１０月２７日（水） ４　時間目	**学　級 使用教室**	３　年　Ａ　組 教　室

○　主題設定の理由

・主題観

中学３年生の最大の関心事のひとつに進路の選択がある。避けて通れない問題であるとともに，１４，５歳の生徒にとっては荷の重い課題である。ここには自らの個性や適性の把握の問題や，将来の人生設計・職業の選択といった問題も含まれてくる。そして目標に向かって長いスパンで努力するといった強い意志の問題も含まれる。そのような中で，現実の進路選択を題材に生徒にこの問題を考えさせることは，この時期の生徒にとっては有効であると考える。

進路に関していえば，３年生半ばまで未定というものもおり，全体的に確かな目標を持っているものは少ない。そこには，進路選択の基準をテストの点数のみにおいて自らを合格可能校に当てはめる傾向も見られる。また，その高校の周囲の評価に流されたりする傾向も見られ，高校３年間をモラトリアム的に，楽に楽しく過ごし，将来の決定は先送りにしようとする気持ちが濃く，主体的に自分の生き方とからめて進路について考えているとは言いがたい。こうした生徒たちに，ぜひ理想の実現に向けて，自分の生き方を見つめることの重要さを考えてほしいと考えた。

・生徒の実態

本学級の生徒は，全体的に明るく，また，男女の仲も良く，特に行事などを中心に，協力しながら前向きに取り組んでいこうという生徒が多い。しかし，学級には不登校の子どももおり，何かに向けて取り組むとき以外は自分には関係ないというような雰囲気を持った生徒もいる。さらに，時と場を考えずに，自分勝手な行動をとることがある生徒も若干名見られる。そのような状況の中，進路に対しては少しずつ生徒の中で意識が高まりつつあり，学習面でもがんばる生徒が増えてきている。だからこそ，進路に対する不安や悩みを抱えている生徒もたくさんいるので，今回の授業を通して，少しでも進路選択，生き方に役立てていけたらと思う。

・資料観（指導観）

自分の志望校まであと一歩で伸び悩む主人公。進路相談の際に志望校変更の話が出る。そういった現実に直面している問題場面を考えながら，最終的には「どこかのだれかの話」ではなくて，「現実の対処問題」として考えてほしい。そして，こうした場面での考えられる選択を３人の友人のアドバイスに仮託し，この間で揺れる主人公の葛藤を中心に自分の中にも葛藤を起こさせ，さらには，総合的な学習の時間や学活での進路指導など，今後の進路選択，生き方に役立てられるように支援していきたい。

ねらい	自己をみつめ，自らの個性にあった目標を定め，その実現に向けがんばることの大切さを自覚し，よりよい生き方を求め実践しようとする判断力を養う。
資　料 準備物	読み物資料「進路」　　事前アンケート 道徳ノート　　中村健也とシュバイツアーのプリント ビデオ「プロジェクトＸ」　　ＣＤ「シュバイツアー」
板書計画	自分自身で道を！ 「進路」 ①『進路変更型』 ・シュバイツア 「私は三十歳までは音楽と神に人生を捧げ、三十歳からは人々のために人生を捧げよう」 ②『初志貫徹型』 ・中村健也 「開発は先の見えない夜行列車、知恵と度胸で突き進め」 ①康夫　②明　○俊夫 これからの自分

○展開

	学習内容，　　発問・指示（生徒の反応）	指導・支援の工夫	配時
導入	1，本字の学習内容を確認する アルベルト・シュバイツアーと中村健也の生き方を示し，今後の進路を判断していく手助けにしたい。	・進路変更型…シュバイツアー ・初志貫徹型…中村健也 （プロジェクトX） ・今日考えるべきことをしっかりと伝える。	15 分
	2，資料を読む。 これからの自分の進路について考えましょう。資料を読みます。	・教師が範読をする。	6 分
	①とりうる行為の確認 ○康夫の意見　→　初志貫徹に賛成 ○明の意見　　→　志望校の変更に賛成 ○俊夫の意見　→　進学はやめ，就職する		1 分
展	②３人の友達はどういうつもりで言ったのか，３人の発想や理由を考えてみよう。 ○康夫　・一度決めた目標だから ・目標は高く持っていた方がいいから ・就職や進路変更はやっぱり逃げだ。主人公の目標を考えるならがんばるべきだ。 ○明　・やるといっても無理な目標ではやる気も起きない ・同じ高校の資格がもらえるんだから，まずは入ることが先決 ・進路変更は逃げではない。自分のいけるところ出に入り，そこでがんばればよい。 ○俊夫　・主人公の本音は就職だ ・見栄で高校へ行ってもしょうがない ・高校ばかりにこだわる必要はない。勉強が嫌いなうえに，主人公の個性や最終目標を考えれば，就職だって立派な選択だ。	・３人はそれぞれ意見は違っても，いろいろと考えていることを分からせたい。	10 分
開	③主人公と３人の友達と比べてみて，あなたは主人公のことをどう思いますか。 ・優柔不断だ。 ・だらしがない ・迷う気持ちがよく分かる	・他の３人と違って迷っていること，３人の意見に振り回されていることに気づかせたい。	4 分
終末	3，自分を振り返る 事前アンケートプリントを再度見て，進路に対する自分の気持ちを振り返り，考えたことを書いてみよう。	・今の自分をしっかりと見つめ直してもらいたい。	7 分
	4，本時のまとめ ・教師の説話		4 分
	5，道徳ノートに分かったこと，考えたことを記入する		3 分
関連	総合的な学習の時間「生き方・進路」 学活「進路」		

「進路」

槙田博之

「よく考えて自分で決めなさい。」

先生の最後の一言が耳の奥に残っている。中学校生活も残りわずか、十一月のある日、先生から進路相談ということで呼び出され、いろいろと話しをした。

「お前の進路のことなんだけどさあ。」先生はそう言うと、一枚のグラフを机の上に置いた。そこに僕の六月からの実力テスト、定期考査などの結果が折れ線グラフで書いてあった。僕の志望校の合格ラインが赤線で示してあり、いいところまでいったときもあるが、一度もその赤線よりは上に出ていなかった。分かってはいたが、目の前にどんと出されるとやはり少し「ドキッ」とした。

ぼくは春から「合格圏ぎりぎりだよ。」という話しをずっとされてきていた。「もう少しがんばれば…」と言われながらも、何となくずるずるとここまで来てしまった。今日の話しも結局は同じだ。先生は「本当にぎりぎりだぞ。このままいけばカケだぞ。本当にどうするんだ。」と「本当」という言葉ばかりをくり返していた。でも、いつもと違ったのは「進路の変更」の話が出たことだ。確かにそうなのだ。今のままでいけば落ちる可能性は高い。進路を決める三者面談まではあと一ヶ月あまり、もうどうするか決めなければならない時期にきているのだ。

ぼくの志望校であるM高校の機械科は、このあたりでは中くらいのけっこう人気のある高校だ。普通科といっても何となく目標のもてないぼくは、前から機械いじりが好きだったこともあり、二年のころからM高校の機械科がいいなと思うようになっていた。それは、それまで目標がもてずにふらふらしていたぼくがやっともてた目標だった。けっこう我が強く、人に使われるのが嫌いなぼくは、お客を相手にする商売よりも機械を相手にして、できれば将来小さな工場でもいいから独立できたらなどと夢見ていた。だから、それ以外の高校といわれてもいまいち思いつかないし、やる気も起こらなかったのだ。

かといって、勉強する気があるかというと、ぼく自身勉強があまり好きではない方だ。テスト前などやる気になったときはけっこうやるときもある。やる気がないときは全然だめだ。「高校など行ってどうするのだ」という気持ちにさえなるときもある。そんなときは、親やまわりの目さえなければ、技術を教えてくれそうな工場を見つけて、就職した方がいいのかな、などとも思うのだ。

進路相談を終わって、教室に帰ってくると友達が待っていてくれた。

「どうだった？」と聞かれてぼくは、「やっぱ、ぎりぎりだってさ。進路変更のことも言われちゃったよ。」と精一杯明るく答えた。

部活でも一緒だったがんばり屋の康夫は、「何言ってんだよ。今さら進路変更なんて、お前二年の時からM高一本だったじゃないか。一回決めたら努力あるのみ、迷ってたってしょうがないよ。迷ってるひまがあったら勉強、勉強！」と彼らしく励ましてくれた。その言葉を聞くと、「そうだ、一度決めた目標なんだ。こんな時期に悩んでどうする。やるしかない！」とも思う。

この間、進路相談をすませた明からは、「無理すんな。無理すんな。おれもこの間そう言われて変更することにしたよ。普通科に行っても高卒の資格は同じだしさ、あわてて進む道を決めなくても、まずは自分にあったとこに行くのが一番だよ。落っこちちゃ元も子もないじゃん。今までやってきた結果がそうなんだから、すっと変えちゃいな。そんで、そこにばっちり入れるよう勉強した方が無理かなと思いながら勉強するよりも確実だぜ。」と割り切った言い方をされた。そうすると、「そうだなあ、ぼくがM高にあこがれたのは人気があって、このあたりでもまあまあ評判のいい高校ということだったのかなあ。無理して入って勉強についていくのがやっとだったりしたら嫌だし、ある程度自分にあったところにいって、それから専門学校や、工業大学などに進んだ方がいいのかなあ。」とも思う。

この間の進路相談で就職を決めていた俊夫も口をはさんできた。彼は自分の好きな自動車の仕事につくために整備工場の下働きをすることにしたのだ。彼は「何ごちゃごちゃ言ってんだよ。お前も俺と同じで勉強好きじゃないんだからさ、早く仕事について技術を身につければいいじゃないか。お前、M高、M高って言ってんの見栄じゃないのか。」とズバッと言われた。最後の一言には少しムッとしたが、「ぼくの本心はそうなのかもしれないな。」と一瞬ドキッともした。確かにたいした目的もなく高校へ行って、退学するよりはそっちの方がいいのかもしれないと思った。

聞いているうちにどう考えればいいのか分からなくなってきた。三人の言うことはそれぞれ分かる。とにかく今の宙ぶらりんな気持ちじゃだめなんだ。何も手につかない。もう一度自分をよく見つめなおさなきゃ…。

でも考えれば考えるほど、どうすればいいか分からなくなってくる。ぼくはいったいどうすればいいのだろう。いずれにせよ、一ヶ月後には結論を出さなくてはならないのだ。

ぼくはどうすればいいんだろう…。